



帰してはいけない小児外来患者

崎山弘, 本田雅敬編集. -- 医学書院, 2015.

ISBN: 9784260021388

REVIEWER

医学部 医学科 4回生

小児科の外来で「ミスをした」ためのノウハウ本

小児科の外来にて起こりうるミスと実際の症例でそのミスがいかに回避されたかを紹介する本である。同シリーズの「帰してはいけない外来患者」とは題名もデザインも類似しているが、小児科の内容という点以外にも構成や症例の紹介方法などの違いが多い。

本書は非常に簡潔な総論と症例紹介からなる。

総論は、医師がどのように疾患を見逃してしまうか、という観点から診断のつけ方を紹介している。診断学の入門と言えなくはないが、エッセンスを分かりやすくまとめた、と言える内容ではない。また小児科特有の内容は書かれておらず、この総論のためだけに本書を読む必要はないだろう。

本書の価値はその後の症例紹介にあると考える。

各症例は「診療経過」「鑑別」「教訓」「最終診断」という順で紹介されている。

「診療経過」では、一般的な症例紹介のフォーマットに沿ったものであり、患児の紹介や受診した経緯が記されている。この診療経過から直ちに診断が付けられることはないため、症例問題的な利用はできない。

「鑑別」では、鑑別疾患とそこに至った医師の思考過程、除外・確定をするために行った検査とその結果が記されている。その検査の結果からまた異なる鑑別を上げて検査を行う、というサイクルはCBTの4連問に似ていて面白い。

(裏へ続きます)

493

92

Sa 42

医図開架

⇒⇒⇒

「教訓」は鑑別のなかで描写されている医師の思考過程をいくつか取り上げ、それを実臨床でも使えるように一般化して解説している。一般化の程度はさまざまであり「親の表情の変化を見逃さない」という、おおよそあらゆる小児科外来に応用できそうなアドバイスから「乳児発症の出血性十二指腸潰瘍では緊急手術を考える」というかなり限定的なアドバイスまである。いずれのアドバイスも重篤な事態を回避するための非常に具体的なクリニカル・パールであると同時に、成人科の本にはおそらく書かれないであろう内容であり、本書を非常に貴重な本にしている。

小児科の外来でミスをしないうための具体的な助言を求めているなら、一読の価値は十分にある。

受理：2019-01-29